

C マルクスとシティズンシップ—政治的自由と国家の両義的關係

世話人： 隅田聡一郎（一橋大学）

報告者： 柏崎正憲（東京外国語大学）、隅田聡一郎

討論者： 植村邦彦（関西大学）

参加者 約30名

本セッションでは、カール・マルクス『ユダヤ人問題によせて』という共通のテキストを参照することで、政治的自由や市民的諸権利に関するマルクスの政治思想を再構築することが試みられた。マルクスは、このテキストにおいて「政治的自由」の意義を論じながらも、市民の権利としての自由を人間の普遍的解放とは同一視しなかった。両報告者は、この「政治的自由」をめぐる両義性について、異なる観点から検討を行った。

第一報告（柏崎）は、初期マルクスの「政治的自由」をめぐる両義的態度を理解するために、政治的自由がマルクスにとって何を意味したかという問いと、この種の自由をめぐる言説様式の歴史のなかでマルクスは何をしたのかという問いとを関係づけた。マルクスの時代には、ドイツ観念論的な特徴を帯びた共和主義（ヘーゲル左派）の枠内にある「人間性の完成としての政治的自由」という言説が流通していた。マルクス自身は、この共和主義的理想を共有しながらも、政治または国家への参加を自由の実践と見なすことがもはや不可能になるところまで、共和主義的理想を反転させたのではないか。そこで報告者は、初期マルクスの政治思想の特徴を要約する表現として、「反人文主義的な完成主義」という呼

称を提案する。なぜなら、集団的な自己解放と自己完成の可能性をめぐるマルクスの思想は、なお共和主義的と呼びうるかもしれないが、人文主義的・共和主義的伝統のように最高善としての政治的生活といった含意とともに理解されるのは望ましくないからである。さらに、反人文主義というのは、反ヒューマニズムとの関係を念頭に置いた呼称であり、マルクスの「理論的反人間主義」(アルチュセール)が、古代的な人間像と、政治的・市民的自由をめぐる近代的言説との、双方にたいする批判的精神にも鼓舞されていることを示唆している。

第二報告(隅田)は、国家あるいは政治的共同体の成員資格をめぐる思想史においてマルクスの政治思想を位置付けることで、マルクスのシティズンシップ論を再構築した。植村が指摘したように、『ユダヤ人問題によせて』というテキストは、「政治的解放」の限界を指摘するという「明快さ」のみならず、「わかりにくさ」を持ち合わせている。従来のシティズンシップ研究では、マルクスがシティズンシップの形式的性格を批判したと理解されてきた。曰く、近代国家における政治的自由や市民権は、経済的自由を補完すると同時に階級対立を隠蔽するにすぎないことをマルクスが告発した、云々。しかし、報告者は「政治的解放」の「両義性」を理解するために、M・アバンスールの定式を借用して、近代国家の構成員(国家市民)としてのシティズンシップと「国家に抗する政治的共同体」成員としてのシティズンシップを区別し、「国家に抗する政治的共同体」をアソシエーションの次元において把握することを試みた。とはいえ、資本主義社会システムのもとでは、ブルジョワ的権利を相対化することなしにシティズンシップが実在化することはなく、近代国家によって承認された「人権」もまた、国家市民の諸権利としてのみ効力をもつ。したがって、「国家に抗する政治的共同体」のメンバーシップや政治的自由、平等は、ブルジョワ的権利ならびに国家市民権の両者に抗するアソシエーションの次元にお

いて構成されるほかないと考えられる。

討論者（植村）は、まずセッションの主題である「政治的自由をめぐる両義性」について、「両義性」の定義が曖昧ではないか、両報告で意味する内容が異なっているのではないかと苦言を呈した。さらに、第一報告については、B・バウアーの「共和主義」の思想的特徴を明らかにした点を評価しながらも、「シヴィック・ヒューマニズム」系の「政治」思想史にマルクスを位置付けるのではなく、むしろドイツ・ジャコバン派（W・シュルツ）の「唯物史観的共和主義」という系譜のほうが重要ではないかと述べた。また、第二報告については、「自己統治的な市民的共同体」と「生産システム」との関係を考察している点を評価しながらも、アソシエーションの次元に位置付けられた「国家に抗する政治的共同体」は、少なくとも従来の意味での「政治的共同体」ではなく、そのメンバーシップも従来の意味でのシティズンシップではないのではないかと指摘した。

フロアからは、最初に、マルクスの政治思想を理解するうえでポーコックらの「シヴィック・ヒューマニズム」はそもそもどういった意味をもつのか、「アソシエーション」という概念自体の多義性をどう理解するのかという質問がなされた。さらに、古典的共和主義の伝統において「私的所有」が市民の成員資格として重視されてきたが、マルクスにおいてはどう考えられるのか、また「シヴィック・ヒューマニズム」系の「政治」思想史にマルクスを位置付けることで、マルクスの政治思想がもつラディカルさが失われ「政治的リベラリズム」に接近してしまうのではないかという指摘もあった。